

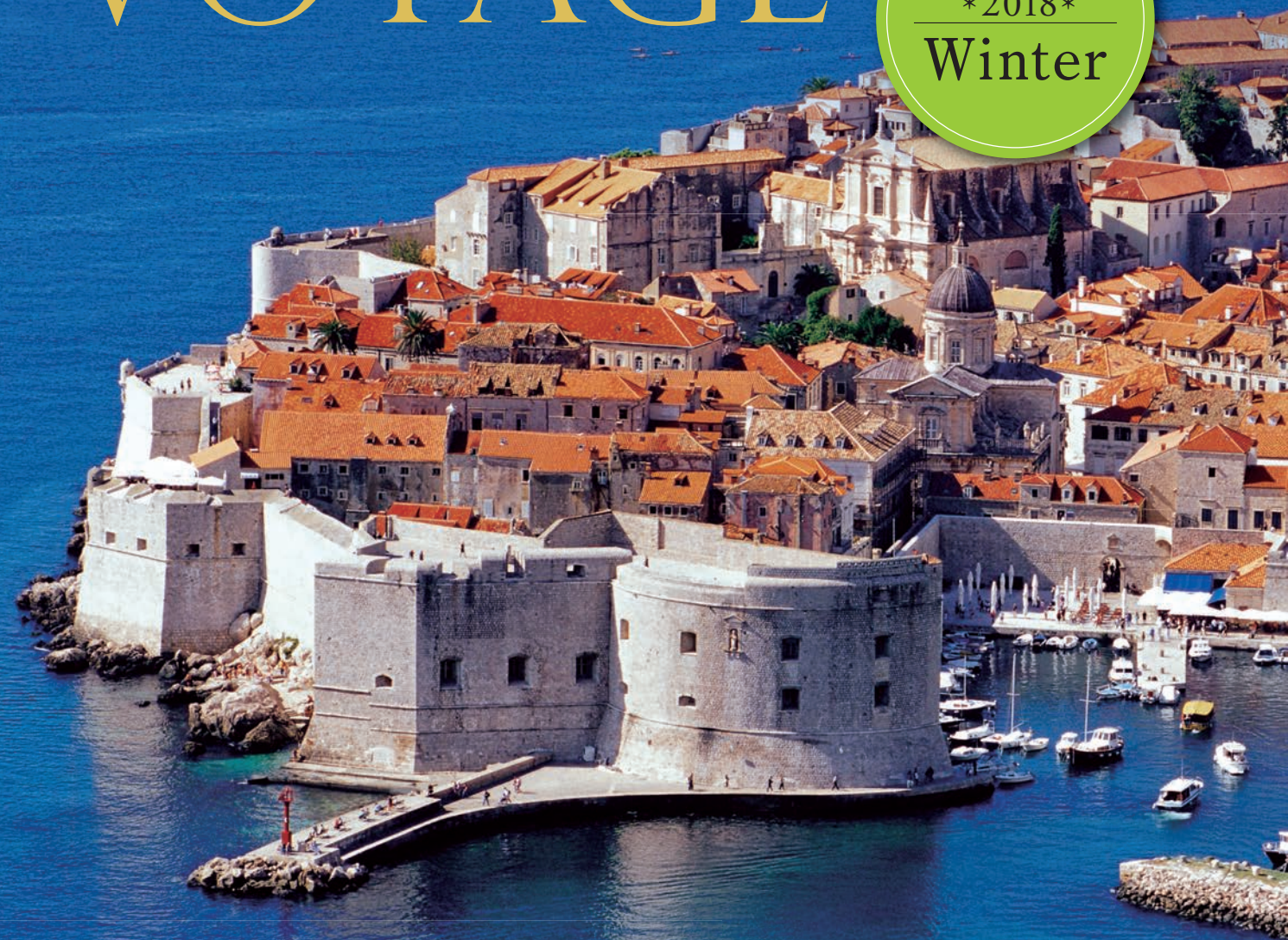
GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2018

Winter



特集

ピースボート 35周年の歩み

第二特集

紺碧の海と悠久の歴史を尋ねる

美しきアドリア海の船旅

[発行](株)ジャパングレイス

ピースボート 35周年の歩み

2018年でピースボートは設立35周年。今まで訪れた寄港地は200箇所以上。そして地球は65周。今となつては当たり前となった「世界一周クルーズ」も、たくさんの苦難を乗り越えて実現したものだった。35年前にピースボートの立ち上げに携わったのは、わずかな名の若者たち。はじまりは小さな船で、世界一周でもなかった。ようやく実現できた世界一周クルーズも、日本発着にすることができなかった。この35年間、ピースボートはいつたいたどのような歩みをたどってきたのだろうか。そしてピースボートは単に世界に船を出しているだけではないということも大きな特長のひとつ。これまでのピースボート、そしてこれからのピースボートに迫ってみた。

35th anniversary

CONTENTS

特集

ピースボート 35周年の歩み…………… P2

PEACE BOAT SPECIAL TALK

ピースボートと歩んだ 35年を振り返る…………… P5

PEACE BOAT NEWS

ノーベル平和賞受賞…………… P9

寄港地に行く ～第100回クルーズ Preview～

インド洋編(モーリシャス・レユニオン島・マダガスカル)…………… P11

第二特集

紺碧の海と悠久の歴史を尋ねる 美しきアドリア海の船旅…………… P13

世界一周いろいろランキング

35周年 寄港回数ランキング…………… P17



Ocean Dream

モンテネグロ・コトル港 停泊中のオーシャンドリーム号

表紙の写真

クロアチア・ドブロブニク旧市街。
第99回クルーズで寄港予定。



はじまりはアジアを巡るクルーズから

本当の歴史を学ぶため、直接アジアに行つて人々の声を聞こう。1983年、「歴史教科書問題」をきっかけに客船での国際交流を思い立ったのが若者たち4名。まさか素人が客船をチャーターしてクルーズを始めるなんて、周囲の誰から見ても無謀な挑戦だった。そんななか、メンバーの熱い想いに心を打たれ、協力してくれたのが大学教授や水先案内人の方々だった。最初のクルーズに集まった参加者は約150名。グアム、サイパンなどを巡る約10日間の船旅で、何もかも試行錯誤という状況で最初のクルーズは始まった。

それ以来、一年に二度のアジアクルーズのためにメンバーが集まり船を出す、という流れが続いていたが、彼らにとって次の転機となったのが1989年のベルリンの壁崩壊。アジアだけでなく「世界を見てみたい」という気持ちが芽生え「世界一周クルーズ」への挑戦が始まった。もちろん他の客船会社もやっていないような試みで、若い彼らに船を貸してくれる日本の客船はなく、チャーターできたのはギリシャ船だった。世界一周にかかる船のチャーター代や寄港地探しにかかる資金など、メンバーの気持ちに込めるかたちで多くの協



1: 1993年から1999年まで計4回のクルーズで活躍した新さくら丸。2: オリビア号は1998年から2003年まで計15回のクルーズを航海。3: トバース号は2003年から2008年までなんと地球を17周。



過去のパンフレットがずらり。行き先はアジアから地球一周までさまざま。

力者が応援してくれた。こうして1990年に実現したのが、日本の団体で戦後初となる世界一周クルーズ（ギリシャ発着）だった。まもなくして1994年には日本発着の世界一周クルーズを実施。1999年には、欧州をまわらない初の南半球航路を実現させた。2000年代に入ると、常に船が地球をまわり続ける「地球山手線構想」が現実のものとなり、2020年にはついにピースボートが開発するエコシップの航海が始まる。

以前は、クルーズごとに条件の合う旅行会社と組んでクルーズを行っていたが、ピースボートクルーズの人氣が高まり、規模も大きくなるにつれ恒常的なパートナーが必要となっていた。そこで「旅が平和をつくり、平和が旅を可能にする」をモットーとするジャパングレイスとのタッグが実現する。そんなオーシャンドリム号は今日も人々の夢をのせ地球をまわっている。

現地の「声」を聞くことから交流が生まれる

35年の間に、ピースボートではさまざまな活動が生まれている。1985年から今も続いているのがベトナムの人々との交流。ベトナム戦争の体験談を聞きに行ったことはピースボートの原点でもあり、今でも現地の若者たちと語り合う交流コースがあるなど、のべ3000人以上の交流コース参加者を生み出してきた大きな活動だ。



被災地では現地のニーズに沿って炊き出しを行う。

約1000名を含め、2日間でのべ1万1500人が参加した。また被災者による証言会を世界で行う「おりづるプロジェクト」では、170人以上の被災者が船に乗った。

ピースボートの活動を通して大切にしているのは、現地の人々の「声」を聞くこと。1984年から続いている支援物資を届ける活動もそのひとつで、スタッフが事前に寄港地に行つて現地の人々の声を聞き、彼らが本当に必要としているものを日本で集めて船で現地へ直接届けている。過去には中米のニカラグアに救急車を運んだり、ベネズエラの貧しい子どもたちにも開かれた無償音楽教育プロジェクト「エルシステマ」のためにピアノやヴァイオリンなどの楽器を届けた。りするなど、物資の種類もさまざま。船に乗っていると、それらの支援物資を

スタッフが手入れしている光景にめぐり合うこともあるかもしれない。

ピースボートの人道支援活動はクルーズ中だけではない。1995年の阪神・淡路大震災では数千人の、そして2011年の東日本大震災ではのべ7万人に及ぶボランティアを被災地に派遣している。これらの活動でも常に大切に行っていることは被災者の人たちの声を聞き、現地に密着したかたちで人とモノとの両面で支援してきていることだ。そういうことが可能だったのも、世界一周クルーズの経験が大いに役立っている。

ピースボートクルーズに乗ってみると、船内での企画や交流コースをきっかけに、世界の魅力だけでなく世界がいま抱える問題に向き合えてよかったという声も多い。そして同じくらいに多いのが、シニアと若者の世代間交流がおもしろかったという声。最近ではアジアの参加者も多く、バックグラウンドも世代も異なるさまざまな人と交流できるのは、この船ならではのかもしれない。ピースボートはまだまだ船旅の途中。35年前も今も変わらないことがひとつ、それは「みんなが主役で船を出す」ということ。皆さんには今までにない人生の楽しみ方をこの船で見つけてほしい。



日本国内で集めたサッカーボールを現地に直接届ける「ピースボールプロジェクト」。

ほかに世界一周を始めてから訪れた南太平洋のタヒチクルーズでは、近くのマルロア環礁でフランスの核実験が行われている現状に目を向け、後に水先案内人としてピースボートにも乗船する反核・人権活動家のガブリエル・ティティアラヒさんと一緒にタヒチの未来を語り合った。ピースボートは「核のない未来」への取り組みを多方面で続けており、2012年には「脱原発世界会議」を主催。海外から約30カ国



文／山下 祥
ライター。学生時代にバックパッカーで世界一周を経験。ピースボートにも複数回乗船し取材を行う。

SINCE 1983

PEACE BOAT SPECIAL TALK

ピースボートと歩んだ 35年を振り返る

2018年に35周年を迎えたピースボート。創設メンバーの一人である共同代表・吉岡達也、水先案内人として関わりの深いルポライターの鎌田慧さん、そしてクルーズディレクターとして活躍する田村美和子という、異なる三人の視点から35年を振り返ってもらった。(聞き手・文／山下 祥)



ルポライター
鎌田 慧
Kamata Satoshi

戦後日本の社会派ルポライターの代表的存在。原発、労働問題、教育などをテーマに、現場に深く入り込み取材を続けてきた。ピースボートの「旅と平和エッセイ大賞」の選考委員長も務めている。

ピースボート共同代表
吉岡 達也
Yoshioka Tatsuya

ピースボート創設メンバーで共同代表。ピース&グリーンボートの共同代表も務める。また、紛争予防国際ネットワーク「GPPAC」の東北アジア地域代表でもある。現在、エコシッププロジェクトを牽引。

クルーズディレクター
田村 美和子
Tamura Miwako

2003年よりピースボートの専従職員となり、これまでにクルーズディレクターを5回務める。日韓共催クルーズやショートクルーズも担当し、世界一周クルーズの乗船経験は9回を超える。

ピースボートの誕生

吉岡…とにかくはじめの頃はがむしゃらでした。当時は東西冷戦のときで、中国やベトナム、ソ連などは壁の向こうという印象だったんです。だからそれらを自分たちの目で確かめに行きたいという強い気持ちでメンバーたちの中にあった。正直、第1回目の船を出したときは、まさか2回目以降も続くとは思っていませんでした。しかし船を出してみても感じたのは、「船はオモシロイ」ということ。船を出すという具体的な目標があったことが、ピースボートがここまで続いてきたひとつの大きな理由だと思います。

鎌田…僕が水先案内人に誘われたのは、1986年頃だったと思います。そのときはまだ船は小さかったけど、当時と今も変わっていないのは「現地を直接訪れて、体験する、考える、体を動かす」というピースボートの精神。そこには観光だけでなく学習という側面も含まれているように思っています。たった1日の寄港地観光でも、そこに行く船内で寄港地にまつわる企画があって学ぶ時間があるし、考える時間もある。何度も船に乗っているけれど、僕自身の人生がゆたかになっていますよ。



吉岡…水先案内人という名称には実はすごくこだわったんです。講師とは言いたくなかったのもあるし、なによりも船関係の言葉なのでしっくりくるかなと思って(笑)。あと観光の話なんですけどね、本当の観光というのは、交流の要素も含まれているべきだと思うんですよ。バスで名所だけを巡ると、1人でも2人でもいいからそこで暮らす人とコミュニケーションを交わすというのは雲泥の差。だからピースボートのやってきたスタイルは、そういう意味で本物の旅行でもあり、本物の観光でもあると僕は思っています。

田村…それはすごくわかります。だからこそ出港のときは特に泣けてしまうんですよ。こちらと遠くから海を渡って来ていて、その港にはそんな私たちを待っていてくれる人たちがいる。

はじまりは アジアクルーズから

現地向かっている船上の時点でそういった出会いが本当に楽しみなんです。そして実際に交流をしてみると、私たちの訪問をこんな想いをもって待っていてくれたんだというのわかるんですね。だからこそ出港時、港から船が少しずつ離れて行く瞬間はいちばん情緒があるように感じられるんです。

吉岡…この35年を振り返ると、80年代にベトナムを訪れたというのがすごく大きいんです。文化とか社会とかあらゆるものが日本と違っていてすごく衝撃を受けました。ベトナム戦争の直後だったので、地下壕など戦争の爪痕がまだ残っていました。自分たちの知ら

ないアジアがあるというのを肌で感じたことを覚えています。

鎌田…世界的にも激動の時代だったから、洋上でもいろんな歴史的な瞬間にも立ち会ったよね。僕が覚えているのは、ベトナムの難民たちを乗せたボートが、ベトナムに遭遇したこと。船が進んでいる間でも常に世界は動いていて、その近くを進んでいくことも多いから世の中で起きていることが身近に感じられる。「歴史と体験」が結びつくのもピースボートの良さだと思います。

田村…それは今でもそうですね。2年前になりますが、ピースボートの船がエーゲ海を航海している時、シリア難民を乗せた船が遭難して子どもたちが命を落とすというニュースを船上で知ったんです。自分たちが航海している海のすぐ近くだったこともあり、世界でいま起きている事象がすごくリアルに感じられたという記憶があります。



世界一周クルーズへの挑戦

吉岡…80年代はアジアを巡る航路が中心だったけど、ベルリンの壁が崩壊して東西冷戦が終わったのが僕らにとっても大きな衝撃でした。世界ではいったい何が起きているのか、中東、ヨーロッパ、南米ってどうなっているのか知りたくなつて。これは世界をまわるしかないだろうと思つて挑戦したのが「世界一周クルーズ」でした。当初、旅行業界の人は相手にしてくれず、ある意味、清水の舞台から飛び降りるような挑戦でした。でも実は最初の世界一周クルーズから満席になったんですよ。

鎌田…そうやって始まった世界一周も、今までに参加した人数でいうと日本人だけでものべ7万人以上いるわけだからね。世界中の人々との交流をそれだけ生み出したという功績は大きいですよ。

吉岡…当時から鎌田さんたちと話していたのは「市民外交」という視点。世界の風光明媚な場所を訪れるのだから、基本は観光でいいんです。でも観光もちゃんと考えて訪問すれば実は市民による外交になるということを初めて世界一周したときに気がついたんです。それが広島・長崎の被爆者の皆さんによるク

ルーズでの証言活動「ピースボート・おりのプロジェクト」になったり、ICANのノーベル平和賞受賞の原動力にもつながついていると思うんです。

そんななかで迎えた阪神・淡路大震災

吉岡…90年代半ばに、私たちは阪神・淡路大震災を体験します。それで劇的に僕らの価値観も変わりました。それまでアジアから世界と、海外をずっとまわつていて、どこか日本は大丈夫みたいな感覚があつたんです。でも震災を経験したことで、自分たちの世界も本当は脆弱じゃないかと思つたんです。いま海外で起きていることと、国内で起きていることがつながつたんですね。それですぐにみんな神戸へボランティアに向かつたんです。これがその後の災害救援活動の起点でした。

鎌田…東日本大震災のときにも、その当時の経験が活かされたよね。ボランティア運動をちゃんと継続させたという



う良さもありますよね。僕は仕事柄あちこちに取材に出かけるんですが、結構いろんなところで過去の同船者から声をかけられるんです(笑)。乗船者は船を降りた後も全国各地で同窓会をやつていて絆も強いんですよ。

これからのピースボート

田村…実は今は日本だけでなく東アジアからの参加者も増えているんです。船内では交流する時間も場所もたくさんありますから、世界を一緒に見てもいいし、船で一緒に考えて、「ああでもない、こうでもない」と話し合うことができるんです。何がいいとか悪いとかではなく、「膝をつき合わせて話し合う」というのが大事ななんでしょう。そうやって同じ空間を長い時間共にして世界一周を終えたときには、ほのぼのとしたアジア平和村ができていたらいなと思つています。それから私たちの船旅はスタッフだけでなく、一緒に乗っている皆さんと全員でつくるからおもしろい。「乗客であり、参加者であり、つくり手である」というのはピースボートクルーズならではのです。実際に乗船された方に船旅の何が面白かったかを尋ねると、皆さん口を揃えて「出会い」だとおっしゃ

ことは大きいですよ。ピースボートは単に船に人を乗せて世界をまわるだけでなく、国内のそういう大災害のときも活動する団体なんですよ。

吉岡…国内外を問わず、市民でも行動を起こせば世界中でもっとたくさんの人を救うことができるんです。湾岸戦争のときには、現地の病院に薬や車イスも送りました。僕らが派遣するのは銃を持つた人ではなく丸腰のボランティア。それが本当の意味での国際貢献なのではないかと思っています。

田村…世界一周クルーズを通じて、いろんな国際貢献のかたちがありますよね。例えばカンボジアの「地雷廃絶キャンペーン」は、現地に行った若者がその状況を見て、これはなんとかしないといけないと思つて日本に帰国後、仲間呼び掛けて募金活動を街頭で始めたんです。そしてその次の船でカンボジアを訪れるときにそのお金を直接渡した。それ以来、地雷を撤去した土地に小学校を建てるという支援が20年近くずっと続いています。

吉岡…それらの活動で大切になっていることは、二方的に現地へ物やお金を送るのではなく、直接自分たちの手で届けに行くことです。これが現地とのつながりや交流を生みますし、すごくピースボートらしいなと思います。



るんです。それを聞いて、これからこれを続けていこうという自信にもなりました。ピースボートの船旅が終わってもその旅の価値はずっと生き続けるんです。だから私は人と人がつながれるクルーズづくりをこれからも続けていきたいなと思います。

鎌田…人生というのは新しい出会いを求めていくもの。それはなにも人との出会いだけではなく、世界中に存在する素晴らしい街並みや大自然との出会いでもよくて、この船はそんな機会が数多くあるからリピーターが多いんだと思います。そういう人間がもっと最も根源的な「人と出会いたい」とどこかに行きたい、何かを発見したい」という気持ちを叶えてくれるのがピースボートなのではないかと最近になって思います。船にはいろんな年代の参加者がいておもしろいのですが、この船に

乗ったことでこれからの未来を担っていく若い人たちがどう増えていくかに期待したいですね。

吉岡…船って小さな地球なんですよね。大海原に行く独立した存在ですから。航海中は途中下船できないし(笑)、燃料だって海では補給できない。つまり、船を体感することによって、地球を体感することができるんです。そんな船の中で、「これからこの地球をどうしたらいいだろうか」と想像力を働かせながら考える。それが今後のピースボートの担う役割だと思います。新造船のエコシップにしても、自然再生エネルギーを使うという先進的な面もありますが本質的な意味はそこにあると思います。船に乗ることで、地球をどう感じてどうしていきたいのか、それぞれがアイデアを出し合い未来に向かって何かを生み出していく。エコシップを含め、ピースボート自体がそのような場になれたら嬉しいですし、そのために私たちはこれからもがんばつていこうと思います。



ん。そもそも出航時はお互い知らない人同士でみんな乗ってくるから、社長さんもサラリーマンもみんな船の上では対等とい



1:ノーベル平和賞受賞報告会では参加者全員で集合写真。2:受賞が決まったら各地で取材も増えた。3:核兵器禁止条約交渉会議でNGOとして発言する川崎哲(右)。



ピースボートセンターとうきょうで行われた受賞報告会にておとりプロジェクトのメンバーや女優の東ちづるさんと記念写真。

ノーベル平和賞受賞

2017年10月6日、ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)がノーベル平和賞を受賞することが発表された。世界101カ国468団体(2017年10月時点)からなるICANにおいて、ピースボートは国際運営グループの一員として活動を牽引してきた。主な活動として、核なき世界の実現に向け2008年から、170名以上の被爆者の方々にピースボートに招き、世界各地で被爆証言会を行ってきた。



「2017年のノーベル平和賞は、ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)」。10月6日18時、ノーベル委員会のレイスアンデルセン委員長が読み上げた名前に、ピースボートセンターとうきょう(東京都新宿区)で行われたパブリックビューイングに集まった人々は互いに歓声をあげた。

ピースボートがノーベル平和賞発表に合わせてパブリックビューイングを行うのは今年で3回目。これまではICANをはじめとした、核なき世界を目指して活動する団体がノミネットされるたび、その年の受賞予想をしながら発表の様子を見守っていた。2017年に関しては、7月7日に核兵器禁止条約が採択され、今回こそはICANが受賞する可能性もあるかもしれないと関係者たちの期待が高まっていたが、事前の予想では別の団体の受賞が有力視されていた。→

ペーリーリーダーであり、自身も長崎の被爆三世である林田光弘さん(25)は「今回の受賞はとにかく嬉しい。しかし、いまここでもらったものは、原石でもあると思います。これからこれを磨いて宝石のようにしていくのは、僕たちの世代なのではないかと思っています」と受賞への感謝と決意を口にした。

受賞の知らせを受け、その日のうちに改めて記者会見が行われた。ICAN国際運営委員でありNGOピースボート共同代表の川崎哲は、ちょうど第95回クルーズが寄港するアイスランド・レイキャビクで開かれる「おりづるプロジェクト」被爆証言会へ向かう移動中だったため、機内からコメントを寄せた。「まず、この受賞は、核兵器の禁止と廃絶を願って、勇気をもつて声をあげてきた全ての人たちが、とりわけ、広島、長崎の原爆被爆者の皆様に向けられたものだと思います。唯一の戦争被爆国であり、世界に平和国家として歩むことを誓ったはずの日本が、今日、核兵器禁止条約への署名を拒み、平和憲法を変えてしまうことを議論しています。こうした問題について、私たち日本の市民は真剣に再考を迫られるでしょう」

9日にはレイキャビクでの証言会を終え、緊急帰国をした川崎による受賞報告会がピースボートセンターとうきょうで行われた。そこにはパブリックビューイングの際には来られなかった「おりづるプロジェクト」参加メンバー

このパブリックビューイングに集まったのは「おりづるプロジェクト」に参加した被爆者3名と、女優の東ちづるさん、そしてピースボートスタッフを合わせた総勢約50名。全員が固唾を呑んで発表を見守る中、レイスアンデルセン委員長が読み上げたのが「ICAN」の名前だった。それを聞くなり、壇上近くにいた被爆者の3名を囲むように、東さんやピースボートスタッフが手をとり合って喜び合った。すぐに司会者からピースボートがICANの国際運営グループの一員であり、ICANの受賞は、ひいてはピースボートの受賞にも値するといったことが説明されると、そこにいた全員から改めて拍手が起き、会場全体に歓喜の輪が広がった。今回の受賞が特定の個人ではなく、「核兵器の使用がもたらす破滅的な人道上の結末への注目を集め、核兵器を条約によって禁止するための革新的な努力をしてきた」という運動そのものに対するものであることに、その場にいた人は感動していた。

「おりづるプロジェクト」参加者の一人である被爆者の三宅信雄さん(88)は「友人や家族など、たくさん亡くなった人がいるので、この一報を彼らに伝えられないのが非常に残念です。でも、ここまで生きてきて本当によかった」と喜びをにじませた。

また国連に約515万筆の署名を届けた「ヒバクシャ国際署名」のキャン



第95回ピースボートで実施された「おりづるプロジェクト」のメンバー。2017年8月13日～11月24日の間、欧州、米国、ラテンアメリカ諸国を訪れ、証言活動を通して核廃絶を訴えた。

15名を含む、約100名が集まった。川崎は彼らを前に「この受賞は、そもそも70年以上被爆者の方々が頑張ってくださった、その活動の上にあるものだと思う。この場を借りて、ありがとうと言いたい。そしてここにいる皆さんにも、ノーベル平和賞受賞おめでとうと言いたい」と言葉を贈った。その言葉に、ICANの活動前から長きにわたって証言活動などを行っていた一部の被爆者の方々が報われた様子だった。

ピースボートにとって、2017年は「おりづるプロジェクト」を始めて10年という節目の年でもあった。被爆者の平均年齢が上っていくなか、ピースボートでは被爆体験の継承者を養成する船内活動も始まっている。今回のノーベル平和賞受賞という「原石」を宝石にすべく、ICAN、そしてピースボートの活動はこれからも世界中で広がっていくだろう。





動物固有種の宝島

マダガスカル

これぞアフリカという貴重な動植物の宝庫。港から車で1時間ほど移動したナハンブアナ保護区では、4種類のキツネザルをはじめ、たくさんの猿や珍しい昆虫類に会うことができる。空へ根を張るかのような不思議な木「バオバブ」もこの島の代名詞。うらやむほどの大自然がある一方、実は世界的に見ても最貧国のひとつに数えられるマダガスカル。それでも街には元気で人懐っこい子どもたちであふれ、マーケットでは地元若者たちによる伝統ダンスが見られることも。インド洋クルーズのハイライトを飾るにふさわしい、美しき大自然とそこに暮らす人々の笑顔が魅力の寄港地だ。



マダガスカルに来たからには会っておきたいキツネザル。

麻で編んだカラフルなお土産。バッグなどの種類も豊富。

市場ではいろんな果物などを売って市民の生活が垣間見られる。



ダイナミックな自然あふれる

レユニオン島

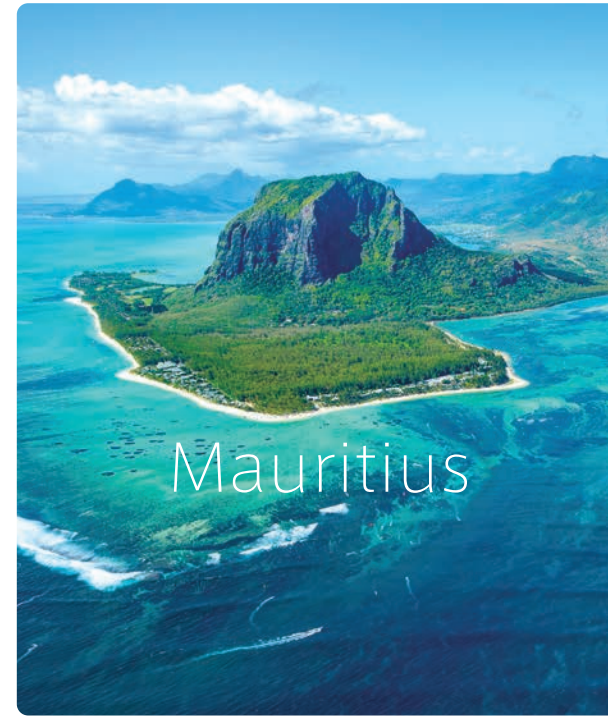
火山島のため平地がほとんどなく、地形も個性的。ダイナミックな大自然や固有植物など、島ならではの自然が評価され、2010年に島の約40%にあたる地域が世界遺産に登録された。フランス海外県のため、西洋風の美しい街並みを楽しめる一方、トロピカルな異国情緒ある雰囲気も満喫できる。17世紀には本格的な入植が始まり、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、インドなどから集まった様々な民族による虹色の文化が魅力だ。食事バラエティーに富んでおり、カレーからルガイユというトマトベースの煮込み料理まで、いくつもの文化が融合してできたクレオール料理は必見だ。



街中ではフランスをはじめとした多彩な文化を感じられる。

カラフルな伝統衣装が街に並ぶ。

虹色の文化にふさわしく運がよければ虹を見られることも。



天国にもっとも近い島

モーリシャス

首都ポートルイスは、ビーチリゾートとして名高い観光地。「インド洋の貴婦人」と呼ばれ、その名の通り美しく大迫力の景色が魅力だ。外界から閉ざされた無人島だったため、独自の進化を遂げた絶滅鳥類「ドードー鳥」の故郷としても知られる。歴史的にインド商人の貿易中継地になっていたこともあり、インド系住民が過半数を占める。アジアからの移民はかつて「クーリー（苦力）」と呼ばれ、彼らの受け入れに使われた施設の遺構アーブラヴァシ・ガートは、ユネスコの世界遺産に登録されている。民族舞踊の「セガダンス」見学や、世界遺産「ルモン山」など見どころは満載だ。



シャマレルにある7色の大地は人気の観光スポット。

ユネスコ世界遺産に登録されたアーブラヴァシ・ガート。

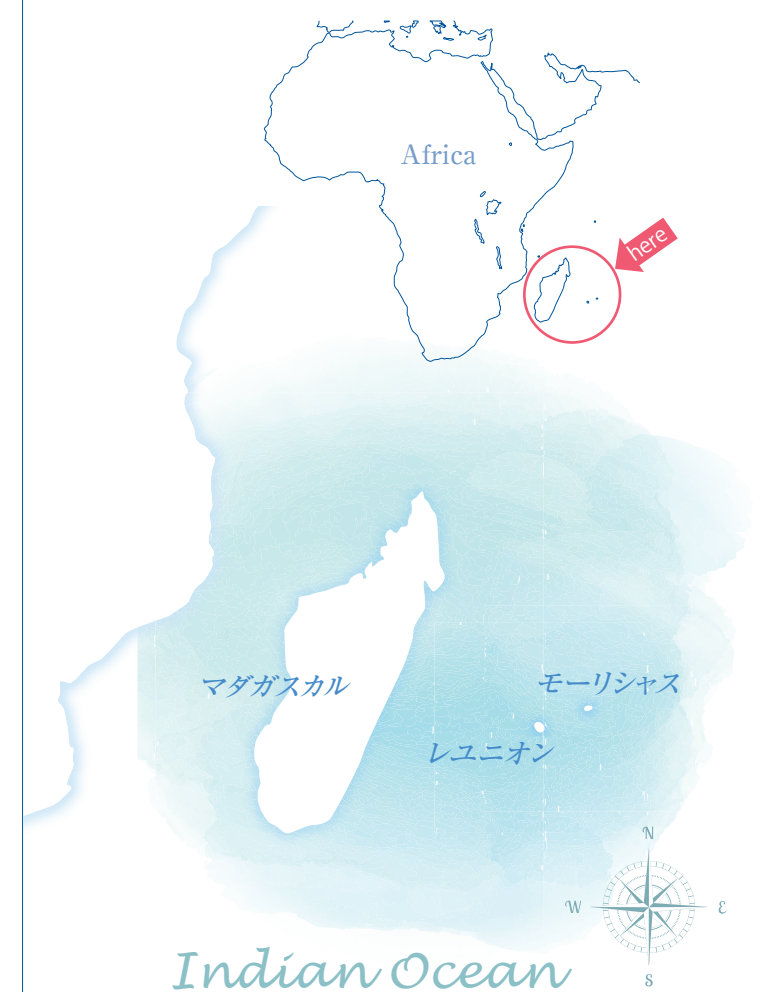
伝統的産業である砂糖生産。お土産にもぴったりだ。

寄港地 を行く



第100回クルーズ Preview 〈インド洋編〉

記念すべき第100回地球一周クルーズで訪れることになるインド洋の自然豊かな3つの寄港地。普段なかなか行くことができない場所だけに、これらを一度に訪れることができる夢のようなルートだ。一方、これらの寄港地を語るのに避けては通れないのが『負の歴史と現実』。気候変動や差別、いまだ続く貧困など、知っておくべきことも多くある。



紺碧の海と悠久の歴史を尋ねる 美しきアドリア海の船旅

世界遺産



第99回地球一周クルーズで訪れるアドリア海の4寄港地。初寄港となるコルフ島とドウラスから、人気のドブロブニク、秘境コトルまで魅力あふれる寄港地の連続だ。

アドリア海の真珠、クロアチア「ドブロブニク」

クロアチア最南部に位置し、オレンジ色の屋根と紺碧の海とのコントラストが美しい「アドリア海の真珠」ことドブロブニク。中世にヴェネツィアやジェノヴァなどと並んで海洋貿易都市として栄えた歴史をもつ街だ。

おすすめの楽しみ方は、まずは旧市街を囲む全長約2キロの城壁巡り。場所によって街並みは表情を変え、海側を歩くとアドリア海の風が心地よく吹く。城壁巡りで街の全体像を味わったあとは、いよいよ旧市街の散策へ。メインストリートはレストランやお土産屋が多く並ぶブラツァ通り。敷き詰められた大理石が美しく、歩いているだけで心が躍る。通りには多くの教会、修道院や宮殿など、たくさん歴史建造物がひしめき合い、歩いているとまるで中世にタイムスリップしたかのような感覚に陥る。その中でも特に立ち寄って

ほしいのがフランシスコ修道院。この中にはヨーロッパで3番目に古いとされる1391年創業の薬局「マラブラーチャ」があり、今でも営業を続けているというから驚きだ。中世から続くレシビにならって作られた化粧水やリップクリームはすべて手作りで、お土産にも人気。散策で一息つくなら、メインストリートのオープンテラスへ。果実酒のラキアを飲みながら食べるムール貝は絶品だ。

さてこの街の代名詞ともいえる美しいオレンジ色の屋根だが、よく見ると鮮やかなオレンジ色と少しくすんだオレンジ色の屋根があることがわかる。実はこの街は1990年代前半に起きたユーゴスラビア紛争の際、数年にわたり包囲され、砲撃により粉々に打ち碎かれたという過去をもつ。今の美しい景観は、街の人々が古い文献を頼りに、空爆前と同じように街を復興させたも



Dubrovnik

ドブロブニク・クロアチア

のなのだ。色鮮やかなオレンジ色は復興した新しい屋根。これらには復興を遂げた人々の街への想いが込められている。ピースボートでは、先の紛争で被害を受けた女性たちによるNGO「デシヤ」との交流プログラムを実施。この団体では、紛争により家族を亡くした女性たちが英語を学んだり、機織りや、刺繍の技術を身に付けたりすることによって生計を立て、さらに目的意識や新しい仲間など自立して生きていくためのきっかけを得ることができるよう活動支援を行っている。交流プログラムでは、そんなデシヤがつくる手工芸品の見学をしたり、彼女たちの作る家庭料理をご馳走になったりし、それらを通じて彼女らの話を直接聞ける貴重な機会となっている。



旧市街にあるドブロブニク大聖堂も必見。

旧市街の後ろにそびえ、ケーブルカーに乗ってすぐのスルジ山の山頂では、ドブロブニクを一望できるだけでなく、独立戦争展示館で当時の紛争のときの様子を学ぶこともできる。美しい街並みを守り続けるために何度も立ち上がったきた市民の力強さによって、ドブロブニクは今日もアドリア海で輝き続けている。



1:ブラツァ通りは多くの観光客で賑わい、レストランや土産物屋が並ぶ。2:中世に造られた城壁は当時のまま残されている。3:デシヤの女性が振る舞ってくれる家庭料理は絶品。



Croatia Goods & Food



かわいいミサンガは女性に大人気。

猫が多いこの街ならではの土産。

割れやすい小物でも船旅なら安心だ。



アドリア海のシーフードは美味。

オープンテラスで食べる新鮮なムール貝とワインも絶品だ。



フィヨルド最奥部にひっそりと佇むアドリア海の秘宝「コトル」

ヨーロッパで最も南にあるフィヨルドを南下し、奥深い入り江を進むと、最奥部に見えてくるのが世界遺産の街コトル。スタッフの中もお気に入り、の港として有名で、この街は入港シーンなしには語れない。コトルを囲むように切り立った、黒い山（モンテネグロ）は国名の由来にもなっており、手つかずの自然がそのまま残る自然の宝庫だ。フィヨルドをゆつくりと進んでいると、両側に絵本のような可愛らしい家々を見ることができたり、「岩礁のマリア教会」と呼ばれる教会だけが建てられた小島の横を通ったりと、デッキの上からすでにこの街との出会いは始まっている。

小さな埠頭に船が着くと、旧市街はすぐ目の前。入り口すぐの時計塔は1602年に造られたとされ、街と共



こと約1時間。大自然が生み出したフィヨルドと、その沿岸に点在する小さな可愛らしい街並みが織りなす素晴らしい景色を見ると、ここが「世界一美しい湾」と称されるのも納得だ。

この街の交流コースのひとつである、モンテネグロで唯一オーガニックオリーブを栽培しているモリッチ家を訪れるツアーは毎回大人気。何百年もの前のオリーブ搾機を見ることができたり、モリッチ家のお母さんによる伝統料理を頂くことができたり、この土地に古くから暮らす人々の一日を垣間見ることができる。また、このコースで買えるオリ



Kotor
コトル・モンテネグロ

ブはお土産にも大人気。街中のレストランで食べることができると新鮮な野菜や

シーフードも、塩やオリーブオイルをかけるだけで食材の味を活かした料理が特徴的。チーズや生ハムなどおいしく、ワインもグラス一杯ユーロ程で楽しめるというから食も楽しみのひとつだ。

コトルの景観はまさに大自然の力で造り出されたもの。日本では見ることができないフィヨルドの絶景に「船で来てよかった」と参加者の満足度も高い。観光地としてまだあまり知られていないだけに、誰よりも先に体験しておきたい寄港地だ。



1: 広々としたメイン通り。2: モリッチ家のオリーブオイルは格別。3: 市場の買い物も楽しい。

Kotor Goods & Food

日本では手に入りにくい伝統のモンテネグロワイン。



かわいいマグネットはお土産の定番。



シーフードをはじめ、どの食材も新鮮で美味。

初寄港

アルバニア屈指のビーチリゾート「ドウラス」



アルバニアの首都ティラナから約36キロ離れた距離にある第二の都市で、同国最大の港湾都市。ビーチリゾートとして有名で、夏には砂浜が見えないくらいにカラフルなパラソルで覆いつくされる。街中には円形劇場跡や城壁など、歴史的な文化遺産が残る。歴史的にイタリアと関係が深く、名物はシーフードや肉料理。かつて鎖国政策をしていたため「欧州の秘境」とも呼ばれていた場所だ。

中世の面影を残すギリシャ「コルフ島」



世界遺産

ギリシャとヨーロッパの文化が共存し、独特のムードが漂う島。中世から地中海の交通の要所として栄え、かつてイギリスやヴェネツィアに統治されていた歴史をもつ。旧市街にはギリシャ聖教会やヨーロッパ風の家々が建ち並ぶなど不思議な調和を見せ、街歩きにはもってこい。水に恵まれ、オリーブの産地としても有名で、オリーブオイルやオリーブ石鹸はお土産にも最適だ。

に長年の時を刻んできた貴重な建造物だ。そして旧市街の見どころのひとつが、聖トリプン大聖堂。1166年に建てられて以降、地震や風雨による崩落もあつたというが、修復を重ね、当時とほぼ変わらぬ姿を今も残している。しかし実はコトルもドブロボニクと同じく1990年代のユーゴスラビア紛争に巻き込まれた街のひとつ。700以上の建物が破壊され、2003年までは世界危機遺産に登録されていた。実際に聖トリプン大聖堂も内部だけは壁のフレスコ画の大部分が剥がれ、ほんの二部しか残っていないことに気づく。苦難を乗り越えて故郷を存続させた人々の想いを感じながら散策を楽しんでほしい。そしてコトルの歴史を物語るもうひとつが、旧市街を囲むように続く周囲約4.5キロの城壁。前方を海、背後を険しい山々に守られたことで、天然の要塞として中世に堅固な城塞都市を築いた歴史をもつ。この地形を活かして貿易で豊かになった商人たちは次々と館を築き、今ではそれらがホテルやレストラン、博物館などに姿を変え、当時の雰囲気そのままだと感じることができる。旧市街から城壁までは登山道をゆく

4

ダナン

(ベトナム)

📍 寄港回数 **37回** 📍

第90回クルーズで寄港

コンテナ貨物、木材などの搬入のための貨物港として有名。ハノイ、ホーチミンに続く「ベトナム第3の都市」として栄えたことでも知られる。1994年から始まった「ダナン青年連盟」を通じたベトナムの若者との交流ツアーは寄港時には欠かさずに開催している。



世界一周 いろいろランキング

地球を何周もしているピースボートだからこそ、さまざまな切り口から語れる世界一周いろいろランキング。ピースボート35周年を記念した今回のテーマは「これまでの寄港回数」。これらの回数を見ると、ピースボートがいかに地球をまわり続けてきたかがわかります。皆さんがクルーズで訪れる港は、ランキングに入っていますか？



5

パペーテ

(仏領ポリネシア)

📍 寄港回数 **32回** 📍

第100回クルーズ以降で寄港

タヒチの首都にあるパペーテ港は、ココナッツ油、バナナなどの輸出を行う観光港として賑わう。入港時には深い緑の山々と真っ青な海が船を迎え入れ、このシーンがお気に入りだというスタッフも多い。バナラビーンズや黒真珠が有名で、ショッピングが楽しい寄港地だ。



1

シンガポール

(シンガポール)

📍 寄港回数 **68回** 📍

第97回クルーズ以降で寄港

世界最大の積み替え港として有名。給油や食料の仕入れのため、ほとんどのクルーズで寄港は必須。地下鉄の駅が隣接するターミナルに入港することが多く、観光に出かけるにはとても便利。多彩な文化や宗教が存在する多民族国家として魅力もいっぱい。



6

イースター島

(チリ)

📍 寄港回数 **27回** 📍

第100回クルーズ以降で寄港

南太平洋に浮かぶ絶海の孤島。着岸できる港がないため、船がいかりを下ろして小舟に乗り換えて上陸する。遠目にモアイ像が見えた瞬間は感動的。数十メートル下まで見える紺碧の海は世界屈指の透明度で、小さな漁港にはウミガメなども見られるという。



2

ピレウス

(ギリシャ)

📍 寄港回数 **45回** 📍

第98回クルーズ以降で寄港

ギリシャ国内最大の港として知られ、年間約2000万人が利用するヨーロッパ最大の旅客港。過去にはピレウス市長を表敬訪問するなど、つながりの深い港のひとつ。アテネはもちろん、ピレウス港周辺にも美味しいシーフードレストランがひしめくエリアがあるので必見だ。



6

クリストバル

(パナマ)

📍 寄港回数 **27回** 📍

第98回クルーズ以降で寄港

パナマ運河の玄関口となる港であり、カリブ海域の主要港のひとつ。1914年に運河建設用資材の陸揚げ港として建設され、運河の大西洋側における行政中心地であった。港の目の前にはレストラン、スーパー、土産物屋が並んでいて、パナマハットはお土産に大人気。



3

ポートサイド

(エジプト)

📍 寄港回数 **39回** 📍

第101回クルーズ以降で寄港

スエズ運河の北端にある石油補給港であり、アフリカ最大の港湾。世界遺産のギザの三大ピラミッドまでは約200kmの距離。ピラミッドやエジプト考古学博物館などの観光ツアーは、乗船者に人気。街中からはコーランが流れるなど、アラブの雰囲気を感じることができる。



船上百景 [夕陽・グリーンフラッシュ]



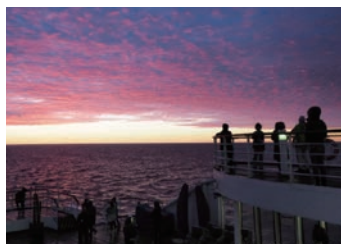
ハワイやグアムでは、「グリーンフラッシュを見ると幸せになれる」そんな言い伝えがあるという。

幸せを呼ぶ緑色のサンセット

世界一周をしても、二度出会えるか出会えないかという貴重な現象「グリーンフラッシュ」。さまざまな条件が重なることで、太陽が完全に沈む直前に緑色の閃光が一瞬だけ輝いたように見える非常に稀な現象だ。

今日のオーシャンドリーム号は、イースター島を目指す南太平洋の上。昨日までペルーに数日間滞在していたため、今日は久々の洋上生活。夕方ふとデッキに出てみると、雲間から差し込む夕日の光が一瞬緑色に。オーシャンドリーム号に長年乗船している乗組員に聞いても「いつも夕方は外で作業しているけれど、ずいぶん見ていなかったよ。なにかいいことが起きるかもね」と笑って教えてくれた。

もう一度見ることが出来るだろうか、そういつて毎日を楽しめるのも、世界一周の船旅だからこそその魅力かもしれない。



地球が生み出す自然美に思わずくぎ付け。



南太平洋の洋上は風も心地よい。



「船は港にいる時、もつとも安全であるが、それは船がつくられた目的ではない」これはブラジルの小説家パウロ・コエリョの言葉です。ここ数年、日本から海外へ出る若者が減少しているというニュースを聞く度にこの言葉を思い返します。「海外は危険」「国内は安全」という空気が漂う現代から遡ること35年前。わずかに数名の若者たちの好奇心を原動力とした二隻の船が世界へ向けて出帆しました。これまでにのべ7万人もの人々が体験したその船旅は、過去二度として催行できなかったことはなく、今年12月に記念すべき100回目の航海を迎えます。

そんなピースボートクルーズがここまで続いてきたのは、これまでご乗船いただいた方々をはじめ、国内のみならず世界中の人々の応援があったからこそです。

これからも、人と人、人と世界とをつなぐ「PEACEなBOAT」は、たくさんさんの夢と想いを乗せて世界の海へ漕ぎだします。本年も一年どうぞよろしくお願ひいたします。(N-i)